読売歌壇

小池　光　選

そこここに私の知らない母が居る母の遺せし日記を読めば　東京都　鈴木真理子

【評】故人の日記を読むのは興味もあるが荷も重いもの。まして親の日記であれば。父の日記はよくあるが、母の日記はめずらしい。こわごわ読んで、おどろいている。

数日を帰省の娘は水まわり磨き上げしのち帰り行きたり　福山市　金尾　洵子

【評】実家に帰省した娘。何をするか、キッチンを磨き、風呂場を磨き、トイレを磨く。ぴかぴかになって親はうれしい。うれしいが、なぜか、少しさびしくもある。

サッカーを夜まで続けたのしいなボール飛んでくグランド外へ　鎌倉市　東峰　隼人

【評】作者は小学生か。はがきいっぱいに書かれた文字がうれしい。ちゃんと五七五七七になっていて立派。また出してください。

相病みし友の最期のひと口は胡麻豆腐なり小さき匙にて　清瀬市　渋谷たい子

窯変の天目の青思い出づ果てなく遠き今日の空はも　四條畷市　松岡　裕子

目の前を枯葉一枚よぎりしにただそれだけに驚くわれは　相模原市　大谷千恵子

宮城県宮城郡宮城村の頃夜空に星が瞬いていし　仙台市　小野寺寿子

脱がなくてよいシャツも脱ぐわれを見てレントゲン技師含み笑ひす　西宮市　椎名　昭雄

声揃えいじめはしませんさせません小学生らは花の苗植え　宮城県　松本美由紀

暖房のほどよくきいた図書館で『遺書の書き方』ゆっくりと読む　竹原市　岡元　稔元

栗木　京子　選

人質や戦禍の中の女たち今日いま生理用品ありや　大阪市　岡　洵子

【評】戦乱に巻き込まれて苦しむ人たち。水や食糧はもちろん必須だが、女性にとって生理用品の不足も深刻な問題である。体調や精神面が案じられる。「今日いま」が切実。

番長は留守番電話番テレビ番入院中につき空席に　福岡県　安田登美子

【評】番長と聞くと少々怖いイメージがあるが、この歌では家を守ってくれる大切な存在のこと。「番」の文字の頼もしさに、その人の回復と退院を待つ思いが託されている。

大写しの幼き孫の写真あり笑顔の中に人格も見ゆ　我孫子市　増田千代子

【評】ただ愛らしいだけでなく写真からは幼い孫の確かな存在感が伝わる。「人格」という毅然とした表現が歌を引き締めている。

妻画く新春日の出の東京湾油彩十号を飾りて新年　東京都　藤野　薫

生産性もはや持たざる身の寒く軒端に吊す十薬の束　宇都宮市　木里　久南

陳さんに我が書きし漢字正されて共に学ぶや日本語教室　横浜市　山田　陽子

旅行にて余りしドルが円安で太ってたああ日本は痩せる　前橋市　西村　晃

英国のホテルにチェックインしてまずするは三叉アダプター依頼すること　東京都　青山　繁

しんがりの車椅子押す同行も皺深き貌の西国遍路　吹田市　辻井　康祐

隙間なく真綿の様な雲覆うこの空見上ぐる兵士居るらん　今治市　青野　千春

俳　万智　選

あの人の生きてる夢をみた朝に抹茶オーレはとけずに残る　豊岡市　神谷みゆき

【評】あえて「生きてる」と言ったのは故人だからだろう。すっきり溶けずに粉っぽさが残る抹茶オーレが、その人への心残りを象徴している。

秋の木は葉が散り尽くす終止形冬木は花を待つ未然形　東京都　武藤　義哉

【評】文法用語をうまく活用して、命の循環が表現された。枯れきった冬を、終止形ではなく未然形としたところも洒落ている。

銭湯の湯船の中のリンゴらの芯音を聞く程に浸れり　柏　市　塩田　淳文

【評】「芯音」という造語が面白い。擬人化されたリンゴの、人間の心音にあたるものだろう。それが聞こえるほどの長湯であり、いい湯なのである。

甘栗を喜ぶ父の太い指黒い油の染みこんだ指　和歌山市　桜庭　紀子

真夜中に走り回って早朝に戻ったような二匹のシーサー　守口市　小杉なんぎん

道端の空き缶拾うことくらい君と十年付き合う理由　金沢市　塩本　抄

昔ならきっとどこかに出かけてたガラス戸越しに日射し眺める　大阪市　黒田　道子

亡くなった祖父母の後になくなってしまう祖父母の住んでいた家　堺　市　一條　智美

天ぷらの油のような夏でした天かすみたいな秋を残して　生駒市　高橋　裕樹

リビングの空気を変える宅配の人の元気な声を受け取る　沼津市　芹沢　詩子

黒瀬　珂瀾　選

時ならず咲くコスモスに雪積もる恥ずかしがるな面を上げよ　新庄市　渡辺　朋恵

【評】冬を迎えてもまだ咲き続けるコスモスに雪が降る。気候変動のためだろうが、とはいえ咲いている以上はその場で与えられた命を誇る。私たちもそのようにありたいです。

兵の日の寄せ書きに読む懐かしき人の名すべて冥界に入る　京丹後市　鉄林　篤

【評】第二次大戦を知る人も多くが鬼籍に入った。戦友たちを見送り、そして私は今を生きる。静かに友らに語り掛けるような一首。

アイロンの朝に陽炎立つ見えて獄の作業場冬来にけらし　仙台市　長岡　義宏

【評】獄中なれば四季の移ろう風景を目にすることは乏しかろうが、こうした小さな変化にこそ季節を感じる。冷え切った作業場に熱を持つアイロンに心を寄せる、小さな抒情。

あるときは歌つくらむと眼をつむる寝釈迦のごとく肘枕して　東大阪市　山本　隆

朝焼けに湯気の吸はるる心地して白米の立つ山の朝餉よ　東京都　古沢　嘉之

井戸端の八手の花の匂ふ朝蔵より聞こゆる酡摺りの唄　長野市　原田　浩生

三十年会わざる友の名前出て同窓会に黙禱をする　日南市　宮田　隆雄

一冊が五円だという売るなっていうことだろう売らずに帰る　東久留米市　中里　正樹

貸出中の隙間嬉しよ図書館の松本清張コーナーの冬　羽曳野市　鎌田　武

小春日の托鉢僧と老婦人頭下げ合ふ京の街角　富士見市　阿部　泰夫

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はつくばね